町長 ひとりごと ⑤⑧

斉藤 譲

「燈火親しむ候」となった。夏の間、緩みがちであった気分も、このところの涼しさとともに、大部張りをとり戻してきたようだ。

秋の夜長の読書三昧は、私にとって充実と幸福感を味わう一時であるが、近頃は根気が失くなって、ついつい手頃な軽い読みものを常とするようになってしまった。大作や原論のように硬く、難解で集中力を持たなければ身につかないような書物は、熱のある若い時分に読破しておかなければならないことだと、今更になってつくづくと知る。

▼悔恨は、子供の頃を呼び起こすものだ。父が、寝物語によくこんな話しをした。

『ある寄宿舎で、勉強に励む二人のライバルがいた。一人は、どんなに頑張っても いまだ一度も相手を抜くことが出来ず、自分には能力が無いのではないかと自信を失いかけていた。

そんなある晩、寝る前に便所に立った。ライバルの部屋の前を通ったところ、その時部屋の中は赤々と燈が灯っていた。「アッ、これだ」と咄嗟に思った。

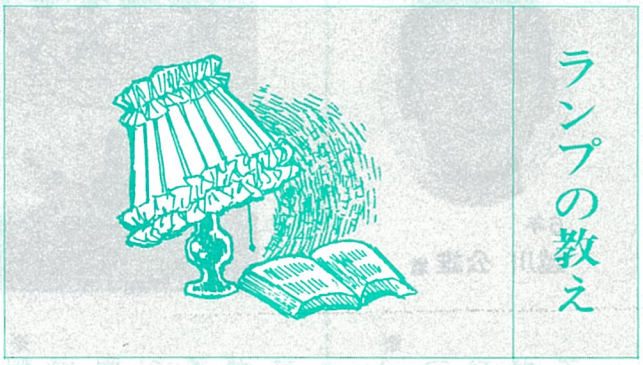
それからは、一層勉強に励んだところ、とうとう相手を抜いてしまった。

大事なことは、能力では無くて、努力だ。努力の大小が、将来を別けることになる。お前も、一生懸命に勉強しなければ、立派な人間になれないぞ。

この話は「ランプの教え」というのだ。』

何しろ、わが父のことであるから、そんな上手な話ではなかったろうが、私にはなぜか子供心にも、気力を振い起こされる思いがしたものである。ただ残念なのは、その後の実行が伴わなかったことである。

▼ところで、私達はいま、物質文化がつくりだした光や音などの刺激の洪水の中で、四六時中生きている。



日中は、電話、コンピューター、機械、車などの音の中に身をおき、夜は夜で、テレビの映像に釘付けになっている。たしかに、今日の科学技術の進歩発展は、著るしく生活に利便性をもたらした。そしていま人々は、この一層の追求こそが、国の発展、人類の幸福を約束する唯一の道だと信じているようだ。しかし、大事なことは、これらの進歩発展の中で、人々が人間性を喪失させるようなことがあっては、決してならないということだ。

▼人間の人間たる由縁は、自らを省みることにある。

ところが、忙しく働く現代のお父さんやお母さんの中には、ついついこのことを忘れてしまっている者が多いようだ。お父さんは、今日一日の疲れを癒し、明日の鋭気を養うために晩酌をする。アルコールが身体中を巡って、快よい眠りを誘う。早寝早起きの実践である。一方、お母さんは一ときも早く食事の後かたずけをして、テレビを見たい一心から、

「お父さん、いつまで飲んでるの。早くご飯を食べてよ。」

と、まず夫をせかせる。次は子供。そして目線をお爺ちゃん、お婆ちゃんに向けるのである。

なんともはや、夜まで気ぜわしいことである。

▼ところで、お父さんの早寝早起は、何といっても健康に一番であることは、疑う余地がない。しかし、これは適量が肝要であって、「過ぎたるは及ばざるが如し」で、晩酌こそが人生の楽しみ、目的となってしまってはいけない。

それにしても、本当の健康は、心身共に健全でなければならないのであって、早寝だけでは、心が萎てしまう。働き盛りのお父さんは、家庭は勿論、社会の中心であり、その存在は重い。この時こそ、男であり、父親である以前に一人の人間として、静かに自分を省みることや、読書による広く果しない世界への旅が必要ではあるまいか。これが、心の洗濯であり、心を養い、人間を磨くことだと思う。お母さんにしても、然りである。

▼さて、そのために先ずしなければならないのは、静寂の時をつくることである。秋の夜長に、テレビやラジオの音を一切しゃ断し、静かに瞑想したり、本の頁を開いてみよう。きっと、今までに気づかなかったことや、見失っていたことが、目から鱗が落ちるように、はっきりと見え、現れてくるはずだ。この時人は静寂の尊さに気づくはずである。

私は常々、静寂は求道に通ずると思っている。

「一穂の青燈 万古の心」である。